

飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

第 259 回 そもそも「アメリカ人」って、何??

2008. 5. 25

米民主党の大統領候補指名を争うヒラリー・クリントン上院議員は23日、劣勢の選挙戦を継続する理由として、同党の候補指名を目指したロバート・ケネディ元司法長官が1968年6月に暗殺された事件を挙げた。ライバルのオバマ上院議員が“不測の事態”に見舞われることを期待したととれる極めて不穏当な発言で、同氏は「遺憾だった」と陳謝した。～「オバマ氏暗殺」を期待? ヒラリー氏大失言 ～と題して5月24日9時59分、産経新聞は配信した。

混沌とした民主党の大統領予備選挙、悩めるアメリカの現状を象徴する様相を呈してきた。誰が大統領になるのかも、もちろん我国にとっても重要なことだ。が、そもそも「アメリカ人」とは何なんだ!…今回は、そんな視点でコラムを書いた。

通常、国家は多く民族の集団である。それを民族国家と呼ぶ。民族国家では、そのメンバーのすべてが共通の伝統を持ち、共通の言語を話し、そして共通の文化をつくる。国民とは民族集団のことなのだ。(加藤秀俊著「アメリカとアメリカ人」参照)

それにひきかえ、アメリカ人は民族集団ではない。「アメリカ人」の主な人種構成は、ドイツ系約15%、ヒスパニック・ラティーノ約15%、アフリカ系約12%、アイルランド系約11%、イギリス系約9%、イタリア系約6%、アジア系約4%、ポーランド系3%、フランス系約3%という状況であり、明らかに、アメリカは多民族国家なのである。

民族だけではない。人種構成もまた複雑である。およそ人類は一般に白色人種(コーカソイド)、黄色人種(モンゴロイド)、黒色人種(ネグロイド)の三種類に分かれているが、そのすべてがアメリカにいる。文化的に主流を占めるのは白色人種だが、南部を中心とするニグロの人口は1,500万人に達し、また、太平洋岸を中心に中国系日本系など、蒙古族に属する人びとがいるが彼らもまた「アメリカ人」なのだ。

つまり、「アメリカ」だけは別なのかもしれない。その人間が何に所属・帰属しているかの意識は、国家・民族・人種などが一般的であるが、アメリカ(アメリカ合衆国)の場合は多人種・多民族国家的色合いが強いため、「アメリカ国籍の人間」という解釈がアメリカ人・アメリカ人以外の人間の双方に妥当であると思われる(「はてなダイアリー」参照)。

そんな観点で大統領選も傍観しなければ、とても日本人には理解できないだろう。でも、短い僅かなアメリカの歴史の中で、国家元首に黒人系がついた事実はない。今でも平然と、黒人排他思想は根強く残っている。オリンピックの競泳に、なぜ黒人が出場しない??

そして女性も、国家元首に就かなかった。歴史と文化を共有しないアメリカ人は、そのコンプレックスか、意外と「名門好き」、これも客観的事実である。ジェントルマンであるべき「必需品・レディ・ファースト思想」は、形而上的パラドックスと、僕は思っている。第259回コラムで書いた通り、女性を崇め立てる思想を实践として許容できるのは、我日本人、天照大神の大和心だけである。そんな中での民主党予備選挙、どちらが勝っても、共和党を無視できないかも…イヤイヤ、うがった見方かもしれない。